

国語科学習指導案

平成16年11月10日(水)第6校時

1年A組 指導者 椎原 由美(コース1) 1A教室

森下 正啓(コース2) 2階少人数教室

授業の視点

〔コース1〕

古人の月に対する「あこがれやおそれ」や「自分との共通点・相違点」を図式化し、考えを交流する活動は、古人のものの見方・考え方をとらえ、自分のものの見方・考え方を広げるために、効果的であったか。

〔コース2〕

歴史的仮名遣いと意味のまとまりを確認するための音読シートを用いた学習は、聞き手に伝わりやすい音読ができるようになるために、効果的であったか。

1. 教材名 わたしたちと古典 かぐや姫の物語 (単元 5 古典と出会う)

〔現代の国語1 三省堂〕

2. 考察

(1) 教材観

生徒は小学校において古典短歌を学習しているが、本格的に文章として文語文にふれるのは初めてである。本教材は「かぐや姫」の物語として、絵本、紙芝居などを通して広く知られている作品なので、古典への興味・関心を抱かせるとともに、今後の学習の基礎作りとしては格好の学習材と言える。また、知っているから入りやすいと同時に、知っていたはずなのに思いがけない展開などがあり、新たな発見と出会う文章であろう。いつの間にか古典とも知らずに出会ってしまっている物語を、国語科の学習の中で古典として出会いなおすことは意義のあることであると思われる。

『竹取物語』は、平安時代に仮名で書かれた現存する日本最古の物語である。中古の時代には、物語は文学として認識されておらず、無署名で書くのが普通であったため、作者については当時の学者が僧侶と推定されるにとどまる。作品の成立についても不明な点が多く、口承文学として語り継がれたもので、最初は漢文体で書かれたらしい。後、平安時代初期に平仮名文体に翻訳され、それが現存の『竹取物語』であると言われている。

本学習材では、『竹取物語』の冒頭と結末の箇所が引用されている。また、物語の全体像を把握できるように、間のあらすじが記載されている。さらに、原文と口語訳が対照できるよう記載されており、学習しやすいものとなっている。本文から、当時の人々のものの見方・考え方を読み取ることができるので、現代との相違点・共通点について考えることにより、現代に生きるわたしたち自身を発見することにもつながる。また、音読や暗唱といった音声言語の学習活動を行うことにより、歴史的仮名遣いに慣れるとともに、古文のリズムをつかむなど、古典学習の入門として適している学習材である。

(2) 教材の系統

教材	学習の目標
わたしたちと古典 かぐや姫の物語 (1年)	1 古人のものの見方や考え方を、現代に生きる自分と比較しながら読み味わい、古典の面白さを知る。 2 古文を読み味わうための基本を学び、古文に親しむ。
矛盾 (1年)	1 故事成語の由来を理解し、ものの見方や考え方を広げる。 2 古典の独特な表現に注意しながら音読し、リズムを感じ取る。
平家物語 - 敦盛の最期 (2年)	1 作品中の登場人物の考え方や生き方について考える。 2 仮名遣いや語句の意味に注意しながら、文章のリズムをとらえる。
漢詩の世界 (2年)	1 漢詩に描かれた情景を想像し、心情を味わう。 2 漢詩独特のことば遣いやリズムをとらえる。
枕草子	1 作者のものの見方・感じ方の特徴をとらえ、味わう。

(2年)	2 風物や情景のとらえ方や描き方の特徴を読み取る。
徒然草	1 作者の人間に対する見方をとらえ、味わう。
(2年)	2 古典の意味やはたらきに注意して、心情をとらえる。
和歌の世界	1 作品世界を現代と対照してとらえ、古典和歌への理解を深める。
(3年)	2 語句の効果的な使い方をとらえ、情景や心情を思い描く。
おくのほそ道	1 旅について、人の世界の栄華についての作者の思いをとらえる。
(3年)	2 作者のものの見方・考え方の特徴を、表現との関わりでとらえる。

(3) 生徒の実態

本学級は、男子19名、女子17名、計36名であり、単学級の学年である。学習に対する姿勢は真面目であるが、学習活動や作業にかかる時間の生徒が多い。授業中の発言については、積極的な生徒が何名かいる。NRTの結果では、「読むこと」については全国比が95であり、特に「心情や場面描写を読み取る力」「要旨を読み取る力」が低くなっている。「言語事項」については全国平均を大きく上回っているが、平仮名や片仮名を正しく書けない生徒もあり、学級内での差が大きいため、ティームティーチングを生かした個別指導が必要である。

事前アンケートの結果、国語の学習の中で「物語・小説」を好きなジャンルとして挙げた生徒が14名、きらいと答えた生徒は12名いた。「説明的文章」の好き7名・きらい17名と比較すると、「物語・小説」のほうが生徒にとっては取り組みやすいようだが、「物語を読んで、登場人物の気持ちを読み取ること」を難しいと感じている生徒が半数近くいた。また、音声表現に関しては、文章を音読することを難しいと感じている生徒が6名、暗唱することを難しいと感じている生徒が2名だった。「ことばの意味を理解すること」が苦手な生徒が3分の1いることから、当然ながら、ことばの意味を理解したうえで音読し、暗唱するという段階を踏むことが望ましいと考える。

知っている昔話を挙げさせたところ、ほとんどの生徒が「かぐや姫」を挙げ、話の内容を知らないのはわずか3名であった。ほかには、桃太郎、一寸法師や瓜子姫、鶴の恩返しなど、主人公が植物の中から小さく生まれて大きく成長したり、別世界から人間世界にやってきてまた元の世界に戻っていったりというような、かぐや姫の話とも部分的に似ている昔話が挙げられた。

明治時代より古い時代の文章を読んだことのある生徒は15名と、半数に満たなかった。これは、文語文の形ではなく、現代語訳を読んだものだと思われる。古い時代の文章について「難しい」というイメージを抱いている生徒は27名だったが、「読んでみたい」と答えた生徒が20名いた。歴史的仮名遣いについては、小学校で「八行がワ行に変わる」とには簡単に触れているためか、「かほり」「をとこ」を現代仮名遣いに直せた生徒は多かった。「あなか」「こゑ」は、3分の2以上が正解し、間違えた生徒は文字の形が似ていることから、「みなか」「よなか」「おなか」「こる」などと答えていた。「にほふ」「けふ」については、正解者は極少数だった。

アンケートの結果から、古典は難しいと考えている生徒が多いが、古くから語り継がれている昔話をよく知っていて興味も持っているため、歴史的仮名遣いや古文独特の言い回しなど、基礎的なことを確実に身につけたうえで繰り返し音読することにより、古文に馴染んでいくことが大切であると考えられる。また、現代に生きる自分と比較することにより、古典を学ぶことは意義あることであり、古典を学ぶことは面白いということに気付かせていきたい。

(4) 指導方針

毎時間、ねらいに関わる自己評価カードを用意し、生徒が自由に記述できるようにする。それを踏まえて、まとめの2時間は「古人のものの見方・考え方を自分と比較しながら読むコース」と、「読み味わうために古文の読み方の基本をマスターするコース」の2コースに分かれて授業を行う。1～5時まではTTの指導形態で、つまずきやすい生徒を支援し、6・7時はコース別少人数指導を行う。

導入の段階では、昔話として親しみのある「かぐや姫」のあらすじを、事前に生徒自身や家族が聞き覚えのある通りに書き、知っていることを発表し合うことにより、古くから語り継がれ、馴染みの深いものであることに気付かせる。

現代語の仮名遣いと古文の仮名遣いの違いを理解させるために、「いろは歌」を音読・暗唱させる。書写の授業と関連させ、竹取物語の一節を毛筆で書いたり、水墨画を描いたりすることで古典の世

界のイメージを捉えさせる。

音読については、声の大きさ・読む速さ・リズム・歴史的仮名遣いなどに注意して十分に練習させた上で、指導者が聞いて評価する。暗唱は二人組みでの相互評価とする。

コース1においては、月に対する見方・考え方について古人と現代の自分を比較しながら、資料を基に調べたことや考えたことを記入したり図式化したりできるようなワークシートを工夫する。

コース2においては、聞き手に伝わりやすい音読ができるようになるために、歴史的仮名遣いと意味のまとまりを確認できる音読シートを工夫する。

(5) 授業中における生徒指導

読む活動を観察したり評価カードを書かせたりすることにより、一人一人の生徒の読む能力を把握し、個別指導に生かす。

聞き手を意識した音声表現の練習をさせてから、積極的に音読や暗唱の発表ができる場を設ける。友達の考えをよく聞き、自分の考えと比較しながら更に深められるように励ます。

(6) 校内研修との関わり

本教材は中学校での古典学習の入門として位置づけられ、古典への興味・関心を持たせるとともに、今後の学習の基礎作りをする重要な学習である。そのため、毎時間生徒がめあてに沿って自由に記述できるような自己評価カードを用い、それを次時に生かしていくことが望ましい。まとめの段階ではコース別少人数学習の形態を取り、基礎・基本の定着を図ったり、より発展的な学習に取り組みもうという意欲を持たせたりする。これは、本校の研修主題「きめ細かな指導の充実」や具体的な研修内容の一つである「指導と評価の一体化」に関わってくるものと考ええる。

3. 教材の目標、指導計画と評価計画 (7時間予定：本時はその6時間目)

おおむね満足 十分満足

教材の目標			評価規準			
			関心・意欲・態度	読むこと	言語の知識・理解	
1. 作品に表れた古人のものの見方や考え方を、現代に生きる自分と比較しながら読み味わい、古典の面白さを知る。			古文に親しみ、古典の面白さに気付いている。	本文や資料から昔の人ものの見方や考え方を理解し、現代に生きる自分と比較することができる。	歴史的仮名遣いや古語の意味など、現代語との違いを理解することができる。古文独特の言い回しに注意して音読することができる。	
2. 古文を読み味わうための基本を学び、古文に親しむ。			古文に親しみ、古典の面白さや価値に気付いている。	本文や資料から昔の人ものの見方や考え方を理解し、現代に生きる自分との共通点や相違点を考えることができる。	歴史的仮名遣いや古語の意味など、現代語との違いを確実に理解することができる。古文独特の言い回しをリズムとしてとらえ、音読・暗唱することができる。	
過程	本時のねらい (主な学習内容)	時間	評価の観点			評価項目(方法)
			関	読	言	
導入	「竹取物語」のあらましをつかみ、古典を学ぶ意義を考える。	1				古典を学ぶ意義を本文からとらえ、「竹取物語」を進んで読もうとしている。 古典を学ぶ意義を本文から具体的なことばを使ってとらえ、古典の価値に気付き、「竹取物語」を進んで読もうとしている。(発言・自己評価カード)
	冒頭を読み、古文と現代文の違いをとらえる。	2				古文独特の言い回しに関心を持ち、音読や暗唱に取り組もうとしている。 古文のリズムや歴史的仮名遣いに関心を持ち、進んで音読や暗唱に取り組もうとしている。(自己評価カード)

展 開					古語と現代語の違いがわかり、歴史的仮名遣いに注意して音読できる。 古語と現代語の違いがわかり、歴史的仮名遣いの法則を理解して音読できる。(音読テスト・ミニテスト)
	かぐや姫が月に帰る場面を読み、天人の世界と地上の世界の違いや登場人物の心情をとらえる。	2			かぐや姫が月に帰る場面の様子を、現代語訳を参考に読み取っている。 かぐや姫が月に帰る場面の様子を、古語と現代語を比較しながら読み取っている。 現代語訳を参考に、別れに際してのかぐや姫の心情の変化や、翁たちの心情を読み取り、現代に生きる自分と比較してとらえている。 文語文と現代語訳を読み比べながら、別れに際してのかぐや姫の心情の変化や、翁たちの心情を読み取り、現代に生きる自分と比較してとらえている。(ノート・自己評価カード)
ま と め コ ー ス 別 少 人 数 学 習	〔共通〕 古人のものの見方や考え方を、現代に生きる自分と比較しながらとらえ、自分のものの見方や考え方を広げる。	2	本 時 は そ の 1		〔コース1〕 第6時：月に対する古人のものの見方・考え方 古人が月の世界に対して持っていたあこがれやおそれについて気付いている。 古人が月の世界に対して持っていたあこがれやおそれについて考え、現代との共通点や相違点を考えている。 (ワークシート・自己評価カード) 第7時：五人の貴公子の難題話に見られる古人のものの見方・考え方 自分が選択した一つの難題話に見られる人間のあり方について現代の自分と相通じるものがあることに気付いている。 複数の難題話から、人間のあり方について現代の自分と相通じるものがあることに気付き、考えを広げている。 (ワークシート・自己評価カード)
	〔コース2〕 歴史的仮名遣いに注意し、意味のまとまりをとらえ音読することができる。				〔コース2〕 第6時：音読 つかえずに、正確に音読している。 聞き手に意味が伝わるように音読している。 (音読シート・観察・自己評価カード) 第7時：月に対する古人のものの見方・考え方 古人が月の世界に対して持っていたあこがれについて気付いている。 古人が月の世界に対して持っていたあこがれやおそれについて気付いている。 (ワークシート・自己評価カード)

4. 本時の学習

〔コース1〕

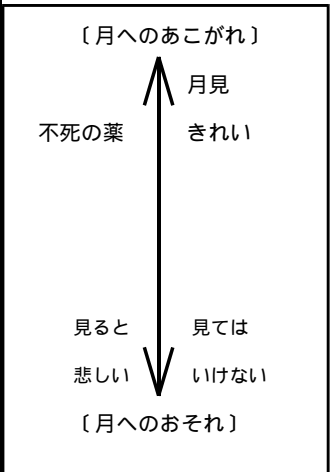
(1) ねらい

古人のものの見方や考え方を、現代に生きる自分と比較しながらとらえ、自分のものの見方や考え方を広げる。

(2) 準備

教師：教科書 自己評価カード ワークシート 月に対する古人のものの見方・考え方が表れた資料
生徒：教科書 ノート 資料集

(3) 展開

過程	学習活動 予想される生徒の姿	時間	学習の支援及び留意事項	評価項目 (方法)
把握	1. 「かぐや姫が月に帰る」場面を音読する。 2. 本時の学習内容を知る。	8	<ul style="list-style-type: none"> 意味のまとまりを意識しながら、歴史的仮名遣いの読み方に注意して、二人組で音読させる。暗唱できる生徒には暗唱させる。 本時は、資料を活用して自分の月に対するイメージと比較しながら、古人のものの見方や考え方をとらえることを説明する。 	
追 求	3. 自分が持っている月に対するイメージや月について知っていることを挙げる。 4. 複数の資料から、古人の月に対する見方・考え方をとらえる。 ・資料から具体的に読み取れない。 ・月の世界の美しさや不思議さを読み取っている。 ・月の世界の二面性まで読み取っている。	5 1 2	<ul style="list-style-type: none"> 初めに、自分が持っている月に対するイメージや知っていることをできる限りワークシートに書けるようにする。 生徒がイメージしやすいように、月の写真や映像を提示する。 資料集を参考にしてもよい。 続いて、教科書やその他の資料から、当時の人々が月に対してどのようなイメージを持っていたのかを読み取らせる。 読み取ったものは、後で分類しやすいように付箋に簡潔なことばで書かせておく。 具体的に読み取れない生徒については、資料の月に関する具体的な記述を指し示すことによって気付かせる。 読み取りができていない生徒には百人一首の月に関する歌の資料や他の解説書など、複数の資料からの情報をつなぎ合わせて自分の考えをまとめてみるよう助言する。 	
解 決	5. 月の二面性について図式化する。  6. 5について発表する。 7. 自分の月に対するイメージとの共通点や相違点を考え、図式化する。	1 5 7	<ul style="list-style-type: none"> 資料から読み取った古人の月に対する見方・考え方を、4人グループで左のように図式化させる。縦軸の上方向を「月へのあこがれ」、下方向を「月へのおそれ」とし、付箋を用いておおまかに分類させる。 グループの中で意見を交換し、気付きながら、考えをまとめていけるようにする。 なかなか分類でないグループには、自分ならどんなものに恐れ、どんなものを恐れるかをイメージしてから考えるよう助言する。 グループごとに古人の月に対する見方・考え方をカードに書き、黒板に貼って、「あこがれ」と「おそれ」について考えを交流させる。 	古人が月の世界に対して持っていたあこがれやおそれについて気付いている。 古人が月の世界に対して持っていたあ

	<p>移動させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めに書いた、自分が持っている月に対するイメージと比較しながら、移動できるようにする。 ・何人かの生徒に発表させ、そう考えた理由を聞くが、これには正解はなく、様々な考え方があることに気付ければよい。 	<p>こがれやおそれについて考え、自分の持つイメージとの共通点や相違点を考えている。 (ワークシート、発表)</p>		
<p>まとめ</p>	<p>7 評価カードに記入し、次時の学習への意欲を持つ。</p>	<p>3</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時で月について古人と現代に生きる自分との比較をし、考えたことを想起しながら、評価カードに記入する。 ・次時は、生徒たちからもっと深く知りたいという希望が多かった「五人の貴公子の求婚話」について、自分と比較しながら、古人のものの見方・考え方をとらえていくことを伝える。 	<p>(自己評価カード)</p>

〔コース2〕

- (1) ねらい 基本的な歴史的仮名遣いの口語読みに注意しながら、意味のまとまりをとらえ音読することができる。
- (2) 準備 教科書、音読シート、フラッシュカード、昔話風の効果音のテープ

(3) 展開

おおむね満足

十分満足

過程	学 習 活 動	時間	学習の支援及び留意事項	評価項目
導入	<p>本時の学習内容を知る。</p>	6	<ul style="list-style-type: none"> ・昔話風の効果音に合わせて音読させることを通して、歴史的仮名遣いに注意し、意味のまとまりを意識して音読することの大切さをつかませる。 ・基本的な歴史的仮名遣いの口語読みを復習させる。 	
展開	<p>歴史的仮名遣いの口語読みを復習する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>例示「いひ」「よるづ」「使ひ」「なむ」「いひ」「うつくしうて」「あたり」の歴史的仮名遣いの読み方について確認する。</p> </div> <p>個人で音読する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>音読シートの古文(p98)の波線部分が読めたら、読めなかったら×を付けて音読をする。</p> </div>	<p>39 (3)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フラッシュカードを示して、指名読みさせる。また、繰り返し口語読みを練習させる。 ・机間巡視で読み全般についてつまずいている生徒への支援を行う。 ・音読シートを用いて、歴史的仮名遣いが読めているかどうかを確認させながら音読させる。 	

	<p>二人組になり、音読シートを交換し、音読し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・聞く方は歴史的仮名遣いが正しく読めているかどうかを評価する。 ・正しい読み方でお互いに練習しあう。 </div> <p>・「しう」をそのまま読んでいる</p> <p>・「ゐたり」を読めない</p> <p>音読シートの古文（p98）を意味のまとまりごとに句切る。句切れた生徒は、意味のまとまりを意識して音読練習をする。</p> <p>一人ずつ音読発表する。</p> <p>昔話風の効果音に合わせて音読する。</p>	<p>(7)</p> <p>(12)</p> <p>(12)</p> <p>(2)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・机間巡視で歴史的仮名遣いに注意し読めているか、本文がつかえずに読めているか確認する。 ・評価が正しいか確認する。 ・歴史的仮名遣いが正確に読めている生徒には、意味のまとまりについて考えさせる。歴史的仮名遣いが正確に読めていない生徒には、読めない箇所に色ペンでふりがなを書かせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・事例「ははははのひにはははぬかない」を通して、意味のまとまりを意識した音読の大切さを気付かせる。 ・現代語訳と比較させながら、意味のまとまりを考えさせる。 ・意味のまとまりに分けられた生徒には、意味のまとまりを意識した音読練習をさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・歴史的仮名遣い、意味のまとまりに注意しながら音読しているかを評価する。 	<p>歴史的仮名遣いに注意しながら音読している。</p> <p>意味のまとまりを意識して音読している。</p>
まとめ	自己評価カードに記入する。	5	<ul style="list-style-type: none"> ・本時で、できるようになったこと、分かったこと、また要望を自己評価カードに記入させる。 	